

「多様性のある優しい社会を作るために」

生光学園中学校

2年 青木えりか

社会に役立てなければ、人には生きている価値がないのでしょうか。生産力があり、他の人の迷惑にならない人だけが必要とされる社会は、生きやすいでしょうか。

私は小学校時代に、障害など特別な援助を要する方たちとの、素敵な交流の機会に恵まれたために、健常な人とそうでない人とが、みな一緒に幸せに共生できると楽観的に考えてきました。しかし、最近いくつかのニュースを見て以来、ずっと考え続けています。

まずは『着床前診断』についてです。着床前診断とは、体外受精した受精卵から、病気や奇形など異常のないものを選別することです。従来、生まれた子どもが成人になれない、あるいは何度も流産が続いてしまうなど、限られた場合でしか行われませんでした。しかし、この春からは『日常生活に著しい影響が出る』場合も、対象になるそうです。例えば、生後やがて失明する遺伝病などがこれにあたります。そして今後も検査の対象になる疾患は多様になり件数は増加する見込みだそうです。このような着床前診断を含む「出生前検査」でお腹の子供に障害があると分かった場合、60パーセントの妊婦が、産まない選択をしています（「ウートピ」サイト内記事より。）

二つ目は、西日本新聞に掲載された、今から四年前に起きた相模原事件の犯人についての記事です。それによると、犯人自身も、自分が社会に貢献

できるか、役に立てるかに悩まされていたそうです。『生産性』を求められる社会にプレッシャーを感じて、やがて障害のある人に対する憎悪感、そして犯行につながったと思われるそうです。

私は、そのような『生産性』『日常生活での重大な支障』といった基準でどのような子供を産むか産まないかが左右される社会のありかたには賛成できません。視力を補うために眼鏡をかける、音読アプリを使う、体が動かせなければ車いすを使うなど、たとえ障害があっても、適切な、新しい技術革新による工夫で、自身も周囲もずっと生きやすくなるはずです。しかし、安易に中絶を選んでいる母親は、社会に助力を期待せず、赤ちゃんのために社会を変えようなどとは考えていません。親は、子どもに無条件の愛を注ぐとよく聞きますが、検査技術が進むと、今後は母親の愛情は生まれる前から「知能指数が良いから」とか「障害がないから」といった『条件付きの愛』になってしまうのでしょうか。女性である私にとってはなんだか残念です。

また、着床前診断や出生前検査で命の選別が行われるようになると、障害者に対する差別や無理解はより悪化するのではないのでしょうか。たとえば、着床前診断には一回 50 万から 80 万円の費用がかかります。となると、そんな費用を支払えない家庭では障害のある子の生まれる確率が下がらず、障害のある人 = 貧しい人という価値観が固まってしまう。他にも、障害のある人が減少し続けてより少数派、いわゆるマイノリティとなると、今よりも発言力が低下し、彼らにとって必要な政策立案も遅れてしまうかもしれません。

理想的な社会とは、強い人材、つまり健常な人にあふれた社会ではなく、社

会的弱者と健常な人々が助け合って生きる、多様性のある社会だと私は思います。障害のある人は怖い人、厄介者と思われがちかもしれませんが、実は、居るだけで社会を優しくして、思いやりある、バリアフリーの工夫が進んだ環境が実現するのを助けているとも言えます。「負け組になるな」「失敗したら自己責任だ」とおびえる人の多い今の社会だからこそ、より大切な存在なのではないでしょうか。

生まれる前に本来持っている障害を取り除け、障害のある人が少なくなった社会は、一見良く見えるかもしれませんが、実際にはとても危険なものだと私は思います。私たちはみんな、いずれは年老いて、病にかかり、あるいは事故にあっただけで障害を負うかもしれません。そうなった時、生産性や社会に役立つかで命の価値が測られる社会で、どう生きていけばいいのでしょうか。

世界のどこの社会でも、人々に多様性があり個性を出し合い補いあうことで、未来を明るく、暮らしやすくしているのだと思います。私は最近、オーストラリアのシドニーにホームステイに行ってみるとまさにそれを感じました。

将来私が赤ちゃんをみごもるとき、着床前診断や出生前検査で、生まれてくる子に障害があると診断されても、できれば、そのまま産めたらいいなと思います。体が自由に動かさなくても、人間関係を築きにくい特性があったとしても、子どもは、自分にとって様々なことを教えてくれる宝物だと思うからです。私はそれを実現できるよう、今から、身近な人間関係から、勇気をだして思いやりを行動でしめすことで、社会をほんの少しずつでも優しくしたいです。